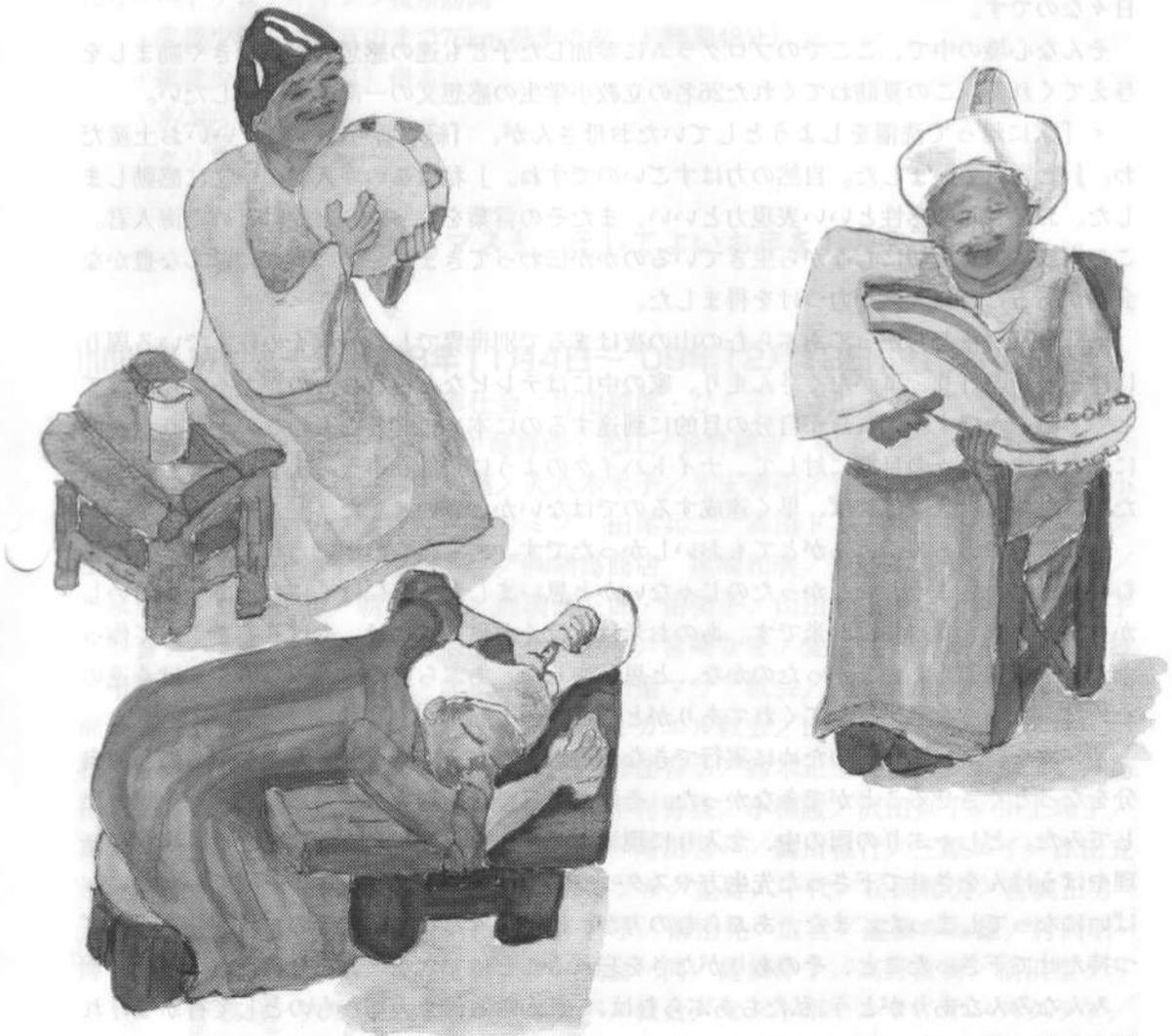


# あぶらむ通信

第31号 2009年12月 あぶらむの会発行  
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1  
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494  
E-mail: abram@hidatakayama.ne.jp  
URL <http://www.kokkufu.net/~abram/>



ヌビアの土人形

# 飛騨俣り

この地に移り住んで23年、年ごとに晩秋から初冬にかけての寒さが薄らいで行くような感じがします。とはいえ、今年も11月3日、昨年よりも16日間早く初雪がきました。季節のめぐりが正常であることに感謝したいと思います。

あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。本年もあぶらむの会に多大なご支援をお寄せ下さり心よりお礼申し上げます。

## ●子ども達の感想文に助けられて

あぶらむの里を訪ねて下さる方には、東京や大阪、沖縄など、都会や遠方からの人がほとんどである。ここまでの交通費を考えただけでも大変なことである。私の周囲、右を向いても左を向いても「不景気」の大合唱の昨今。宿泊収入によって成り立っているあぶらむの会、この山里までの交通費というハンディーを考えるだけでも、いつ宿泊客が途絶えるかと不安をおぼえる時がある。代価にみあう対価は何か、「あぶらむ」の存在理由が問われる日々なのです。

そんな心境の中で、ここでのプログラムに参加した子ども達の感想文が気づきや励ましを与えてくれる。この夏訪ねてくれた26名の立教小学生の感想文の一部をお伝えしたい。

。「家に帰って洗濯をしようとしていたお母さんが、『緑の香りがする。いいお土産だわ。』と言っていました。自然の力はすごいんですね。」私はこの海人君の一文に感動しました。お母さんの感性といい表現力といい、またその言葉をしっかりと受けとめた海人君。この家族は何を大切にしながら生きているのかが伝わってきます。今の時代にこんな豊かな会話があることに大きな力づけを得ました。

。「東京の夜とちがってあぶらむの山の夜はまるで別世界でした。ぼくの住んでいる周りには、ビルの灯り、車がたくさん走り、家の中にはテレビなど便利なものがたくさんあってとても賑やかです。これらが自分の目的に到達するのに本当に必要なものなのかどうか疑問に思います。日々の目標に対して、ナイトハイクのように余計な事を考えず、まっしぐらにただひたすら歩き続ければ、早く達成するのではないかと思いました。」（基裕君）

。「最後に、あのごはんがとてもおいしかったです。あぶらむの畑でとれた野菜とあぶらむのお米だからこそおいしかったのじゃないかと思いました。特にぼくにとって一番おいしかったぞと思う食べ物はお米です。あのお米は、ぼくが思ったには、やはり心をこめて作ったからものすごくおいしかったのかな、と思いました。あぶらむの里のみなさん、ぼく達のためにいろいろな準備をしてくれてありがとうございました。（回君）。

。「旅を終え、悪天候のために実行できなかったプログラムをととてもくやしく、怒りで自分をなっとくさせることができなかった。そして数日後、あぶらむで過ごした時間を思い出してみた。どしゃぶりの雨の中、念入りに現場をチェックし、正しく危険をさげ、少々の無理やぼうけんをさせて下さった先生方やスタッフの方の気持ちに気づき、感謝でむねがいっぱいになってしまった。また、あぶらむの方が、ぼく達みんなに手作りのおにぎりを三こずつ持たせて下さったこと、そのありがたさを忘れることはできない。」（嘉人君）

みんなみんなありがとう。私たちあぶらむは、これからも何を大切なものとして行かなければならないのか、君たちからいろいろと気づかされそしてまた励まされました。ありがとう。

## ●五右衛門風呂と子ども達

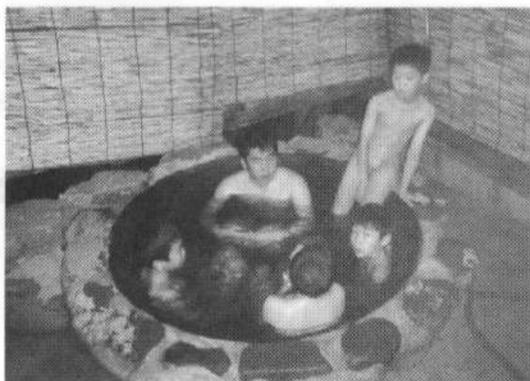
最近、「火」を知らない子ども達が増えてきた。燃えあがる「炎」を見た事がないという。「ガスの炎、見たことないの」、「ガスって何?」。都会はオール電化傾向、爆発の危険が伴うガスも敬遠され、IHに座を奪われてしまった。「火の炎」を見ない子がいても不思議ではない。「火を管理、コントロールすることが危機管理の原点」と固く信じているアナログ人間の私、あぶらむの里中に薪をたく場所を作りつづけてきた。ご飯をたくカマド、パンを焼く石窯、炭焼き窯、サウナ小屋、岩盤浴、そして今回の五右衛門風呂である。

風呂づくりをしていて子ども達のことを思い出した。

戦争で丸裸にされた我家は、私が10歳のころまで風呂というものがなく、近くの農家への「もらい風呂」だった。その風呂が五右衛門だった。冬の寒い猛吹雪の時、母親は素肌に私をだきかかえ、ねんねこわんてんのようなものをはおって私を家まで運んでくれた。その時の母の肌のぬくもりが、昨日のここのように鮮やかに甦ってきた。「こうやって育てられたのだなあー」と思うと心までが温かくなってきた。

この五右衛門風呂が特に子ども達に大好評。釜掃除をする子、風呂焚きをしながらジーツと火を見つめている子。入浴時は興奮のあまり飛び込みジャンプまでする子。おまけにこんな素敵なコメントまで。「私は初めてあぶらむの里に来ました。田舎くさいところやろと思っていました。しかし来てみると自然あふるる素晴らしい所でした。自然ばかりでなく、五右衛門風呂というハイテクなものまで用意してくださって至れり尽くせりでした。」(中1 菜穂さん)五右衛門風呂が「ハイテク」だなんて、私はとっても嬉しくなりました。考えてみれば、どうしてお風呂の湯がわくのか、そのプロセス(過程)が手に取るようにわかる方がハイテクなのかもしれませんね。

適温設定の風呂と異なり、ゴンゴンと熱くなってくる五右衛門風呂、沢水を直接ひき込んでの温度調節のハイテク風呂、あなたも一度いかがでしょうか。



ゴエモン風呂だい!!

## ●カウンター・カルチャー(補い文化)とあぶらむの役割

星野道夫さんとの縁でアラスカを訪ねるようになった私、アメリカという国に一つだけ羨ましく思うことがある。それはあの広大な自然環境厳しい大地で、現代文明に背を向けるかのように、「等身大の力」で黙々と生きる人々がいることだ。それもインディアンやエスキモーなどその地に生まれ育った人たちではなく、米国本土から移住してきた人たちだった。コンピューターに代表されるような文明の利器にたよりきった現代文明がつまづいた時、「私たちの出番よ、私たちがいるから大丈夫」といわんばかりにあの大地で淡々と生活していた。そんな彼らに「あなたの職業は何ですか」と質問してみた。返事がかえってこなかった。私の英語力が貧しくて通じていないのかと思い、あれこれと表現をかえて聞いてみた。私の質問が通じていなかったのではなく、じーっと考えていたのだった。やがて返ってきた

答えは、「この地で生きることです」という言葉だった。アラスカの広大な原野の中での生活には「分業」というものはない。何か一つ他者よりも特別にできるものがあれば生活が成り立つという世界ではない。家の建築や補修、食糧や燃料の調達など、生きるためにありとあらゆることができなければ生きていけない世界である。（それが人間の本来の姿であり、私の子ども時代まではわが国にもその名残りがあったように思う。）「この地で生きるこれが私の仕事」という表現に私は多くの気づきと喜びを得たように思う。

本年も自殺者3万人超という重いニュース。4年間で私の住む高山市の人口がこの地上から消えて行くのである。そう考えると大変な数である。

教育の根幹である「生き抜く力を育てる」ということ、それは一つに「補い文化としてのカウンター・カルチャーの形成」であり、私たちあぶらむの生活がそれであり、この生活を今の時代の中で守り続け、次代を背負う子ども達に伝えて行くことが大きな役割とと思っている。五右衛門風呂もその一つと思っている。

### ●あぶらむの法人化にむけて

あぶらむの会が設立されて23年、活動の拠点となる「宿」ができて20年の記念を迎える。長いようだがアツという間だった。

次代につなぐためにあぶらむの法人化を検討し準備してきた。当初NPO法人と考え準備してきたが、ここに来て「一般社団法人」という新しい線もでてきた。私はこのような事に関しては全くの門外漢なので、専門家の人達の力を借りて検討を重ねている。あぶらむの宿建設20周年を記念として、あぶらむの会も新たな人格をもって出発して行きたいと願っている。

2010年という新しい年も、皆様にとって幸多からんことをお祈りいたします。どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

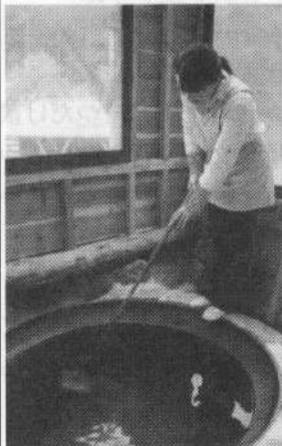
2009年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

2009年(平成21年)10月19日

高山市民時報

(第3種郵便物認可)



昔懐かしい五右衛門風呂を久しぶりに見た。それは国府町宇津江の森で自然体験学習に取り組む大郷博さん(63)がこの夏、偶然入手した大きな炊き出し用の鍋で作ったもの。

風呂の脇を流れるせせらぎから水を引き込み、山から集めた木を薪にして湯を沸かす至って簡単な仕組みで、費やすのは労力のみ。電気も化石燃料も一切使わない。

敷地内には岩盤浴や足湯もあるが、県内外から訪れる家族連れやグループにとって、この五右衛門風呂は人气的だそう。

鉄の浴槽なので、やけどしないか、とおっかなびっくりの子供たちも「全然熱くない」と笑顔を見せ、一方、大人たちはビールを飲んだり、語り合いながら一時間以上も入浴する人たちがいるという。

大郷さんによると、給湯タイプ一般的な風呂と違って、薪の残った火や桶の余熱で湯が冷めにくく、下から上へと湯が対流するので常に温かい湯が体を包んでくれるのが魅力だそう。

仕事を終え、疲れた体を横たえていると「風呂が冷めるでしょ。もったいないから早く入って」と、妻の声にうんざりしている人も多いと思う。

私もその一人だが、化石燃料を使わず、湯が冷めにくい五右衛門風呂こそ、エコ社会にとって、そして何より奥さんにとっかられるお父さんにとって究極の風呂に違いない。

(岡田 望)



「地湧社」という出版社の小雑誌「湧」に掲載されたインタビュー記事です。ライターの片岡義博さんの筆力で、私の中のゴチャゴチャを整理整頓してもらいました。「あぶらむ」を考えるうえで大切な内容だと思います。(タテ書き文章をそのまま印刷したため、少々読みづらいと思いますが、ご了承下さい。)

ルポルタージュ

地に生きる道①

取材文 片岡義博(文筆家)

## 人生の旅に疲れた心身を癒す 「あぶらむの宿」主人、大郷博さん

場を提供するのが宿屋です」

経済性を追い求める今の社会は私たちに立ち止まることを許さない。私たちもまた立ち止まることを恐れ、どこかで疑問と不安を抱きながら、とりあえずの安定を得るために走り続ける。

地面を踏みしめて一歩一歩、自分の速度で一人歩いていく。旅にはそんなイメージがある。だから旅はしばしば

薪運びの仕事を終えた主の大郷博さんが「ああ、どうも」と迎えてくれた。

人生に重ねて語られ、人生は旅にたとえられてきた。かけがえない出会い、

迷ったらしっかり立ち止まること

思いもかけない困難、迫られる選択と決断。そして、時に疲れた心身を癒すための休息を要することもまた、旅と人生の相似た点だろう。

「夜が暗い。音がない。それでこの地を選んだんですよ」。掘りごたつで大郷さんがゆるやかに語り出す。

「車で言えば、ギアをどこかのポジションに入れて絶えず駆動していなければいけない。でもボジションを移す際、必ずニュートラルに入れるでしょ。人生に迷ったとき、しっかり立ち止まって自分と向かい合わないと、どのボジションでエネルギーを駆動させても確かな動力にはならないんです」

人生という旅路で傷つき疲れた心身を癒し、次の旅支度を整えるための宿屋が飛驒の里山にある。地元の古民家を移築したという「あぶらむの宿」は、ナラの林に抱かれてひっそりと、しかし趣きある風格でたたずんでいた。広い土間から太い曲がり梁と漆喰の白壁が見守る大座敷に入ると、雪に備える

「人の心を耕し癒すうえで暗闇と静けさは大切な要素です。暗いと何もできない分、素直に自分と向き合うことができるのかな。静けさの中ではいろいろな声聞こえる。自分が自分に発している声もある。その声を聞くにはまず立ち止まること。旅人が立ち止まる

宿には迷いや苦悩を抱えた人々、不登校や摂食障害、自殺未遂などで行き詰まった人々が訪れる。補導委託で家庭裁判所から半年間預かる少年は八人目を数えた。彼らと田畑を耕し、薪を割り、言葉を交わして暮らす日々。ここは疲弊しきった今の世の中で最も求

められている場かもしれない。

「僕らができるのはただ物事のプロセスを一つ一つたどること。苗からお米を育てる。家なら手をかけて建てる。

でもそれが一番有効なんです。手にした感動はいつまでも残り、次の知恵を養ってくれる。人は人に癒され、自然に癒され、そして神や仏といった人間を超えて大きく包んでくれるものに癒される。それらのつながりの中でトータルな癒しがあるんじゃないかな」

夕食を取った後、掘りごたつの上に焼酎とグラスが並ぶ。



大郷博(おおごう ひろし)  
1946年富山県生まれ。あぶらむの会代表。著書に「あぶらむ物語」(きんのくわがた社)。あぶらむの宿は岐阜県高山市国府町。  
TEL:0577(72)4219

### 「転んだら 起きあがりなさいね」

大郷さんの現在を決定つけた出来事、それはハンセン病療養所、沖繩愛楽園の人々との出会いだった。青年時代「人生は奉仕なり」という言葉に従ってホテル学校から福祉の道に進んだが、身の障害者が生きる現場にたじろぎ途方に暮れた。すぐる思いでボランティアとして訪れたのが愛楽園だった。そこで出会った人々のすさまじい生に、打たれ、揺さぶられ、砕かれた。一九六八年、ハンセン病に対する差別と偏見がいまだ激しいころだった。

入所者の一人、タケさんは少女のころに発病を知った。学校には行けず、弟や妹はいじめられた。世間のむごい仕打ちに、自分さえいなければと十八歳のとき家を出た。人里離れた海岸に小屋を建て、青春の十一年間を一人暮らした。夜には「神様、助けてく

ださい」と月に手を合わせて泣いた。父の死を知ったとき、身を隠し隠し家に向かった。人目につかぬよう、遠くから我が身の不幸をわびて父にお別れしたという。

過去を振り返るタケさんから最後に言われた「長い人生、時には転ぶこともありますよ。でも転んだら起きあがりなさいね」という言葉が大郷さんは激しく震えた。どこかで転ぶことを恐れ、「転ばぬ先の杖」を太く強くしようとしていた自分。人生の途上、人は転ぶ、しかしそれでもまた起きあがるのが人間なのだと教えられた。

「彼らにはどこにも逃げ場がなかった。最後のよりどころの家族にさえも見放され、日々自分の現実と向き合わざるを得なかった。この世的には死を宣告された彼らが逆境の中で生きる指針と意味を見いだしていった。こんな条件のもとで人はかくも真摯に、ひたむきに生きることができなのか。そのまぶしい生き方が僕に生きる勇気を与えて

くれた。圧倒的に巻き込まれたな」

人は最も虐げられて傷つき弱ったものに慰められ、励まされることがある。深い苦悩の涙を流した魂は、自分の生を静かに肯定するとともに、他者の生をも限りなく肯定するのだ。

大郷さんは彼らに導かれるように聖書の世界に向かった。「人生は奉仕」という言葉の自分なりの実現だった。立教大学の礼拝堂付き牧師となり、生きた現実を学ぶために学生たちを伴って、沖縄やアジアで貧困や病気に苦しむ人々と生活をともにした。

教会という組織を離れ、宿屋作りを構想したのは四十のときだった。四人の子どもを抱え、資金も当ても一切なかった。だが土地選びから古家の取得、移築まで人、物、資金が集まり、こちらの思いを超えてすべてのことが時を得て、わずか三年後に宿は完成する。

「僕は求め、信じていた。とにかく今日一日を生きていく、それしか自分が

依って立つところはない。常に立ち返るのは、わたくし化しないこと。この世に必要なだからこそ、こうした不思議なチャンスが与えられた。それは自分の能力とはまったく関係がない。僕の気持ちも曇っていき、これをなしたの自分の力だと錯覚したとき、運はその日のうちに尽き、自分の命さえもあっさり取り上げられるでしょうね」

旧約聖書に見る信仰の父アブラムは、自らの内なる声に従って安住の地を離れ、行く先も知らずに旅立った。

「旅するうえで大切なのは、自分の心の深い深いところに独り言を言える究極の話し相手を持てるかどうか。タケさんが月に向かって毎晩独り言を繰り返したように。この世の誰もが自分を理解してくれなくても、その話し相手は自分を理解し見守ってくれる。独り言はその共なる存在との対話であって、その対話が私という人間性を深みに導いていくんだと思う」

アブラムのように臆せず人生に立ち向かう旅人になる、出会った者と互いに旅する力を育みあう、その思いを携えてここまでやってきた。

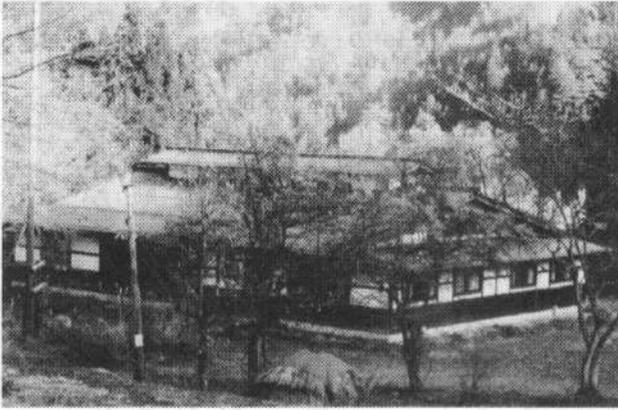
「人生の良き旅人とは、転んだら起きあがること。転んでも転んでも起きあがる。ハンセン病の人たちに会って、すごい旅人だと思ったな。僕はそこまですごい旅人だと思えるかな。もしも彼らに会っていなかったら、やくざの親分になっていたかも知れない。その素養はなきにしもあらずだからねえ」

生きて、生きて、究極的な転びである死にどういう姿勢で臨めるか。

「しっかり生を生きることが死に向かう態度をつくるんだと思う。生きることは何かと問い、問われ、それが長い目で見れば死の準備になる。悟りとは縁遠い僕だけど、死ぬときに支えとなるのは信仰でも何でもなくて、ただ、生きているときに出会い、心を通い合

わせたあの人も、苦しんで悩んで逝ったのだから自分も逝ける、それしか死に向かっていく力はないと思う。生きている間にどれだけそういう友を、仲間を持てるか。それが死に向かつて旅する力の源になるんじゃないかな」

夜が更けるとともに、里山は濃い闇と静けさに浸される。薪ストーブの薪



あぶらむの里・諸魂庵

が弾ける音が聞こえた。

### ■ 今日、そして今日、そして今日

翌朝、二万坪の敷地内を案内してもらった。木工所、樹上のツリーハウス、サウナ小屋、炭焼き小屋、岩盤浴場。自作の十数棟が南向きの緩やかな斜面に点在する。近くには宇津江四十八滝の流れ。訪れた子どもらはここで農作業や山歩き、川遊びなど自然と交感しつつ手作りの喜びを味わう。専門学校

の研修やクラブの合宿も開かれる。  
黙想の家「諸魂庵」は築三百年の古民家を隣村から譲り受け、大郷さんが親方となって建てた。人と自然の営みが幾代にも重なり積もった静謐の気が宿る空間だ。さまざまな旅人がここで学び、語り、演奏し、瞑想してきた。  
小川を通り、コナラの落ち葉を踏んで斜面を上りながら、大郷さんはこの地にフリースクールを作るという年来の構想を語る。この建物は食堂にして、

ここには寄宿舎、この急斜面の林には野外劇場を作りたい。「ああ、もう三回生まれ変わらなきゃだめだな」  
雪が来る。冬野菜の穫り入れや堆肥撒き。日々の仕事が今日も待つ。

「人生は今日、そして今日、そして今日。その一歩一歩の積み上げでしかない。人は高みに立って自分の人生を見渡したいという欲求を持つけれど、高みに立って自分が引いた一本の直線は自分の能力を超えるものじゃない。そこに何の面白みがあるだろう。でも世の中のシステムは一生を計算するように設計し、人は自らの選択肢を狭めていく。気が付けば、今や天下の大企業もアップアップだ。明日を保障された自由なんてないんだ。今日と違う明日を得るためには、どこかで身銭を切らなければ。それが人生の決断につながっていくんですよ。明日に何の保障もない今の世はむしろチャンス、本当の生き方を模索しなさいという神様の配剤かもしれませんよ」\*

## 哀 惜

「旅人の宿」を始めて20年。多くの人と出会い、また多くの人との別れがあった。今年も思い出多い人々を見送ることとなった。それらの人々を偲びつつ、心に残った出来事を記してみたい。

●星野逸馬さん（95歳）、2008年2月15日帰天。1996年8月8日、ロシア、カムチャツカ半島クリル湖畔で不慮の死をとげた、写真家星野道夫さんのご尊父。

不思議なめぐりあわせで道夫さんの葬儀で弔辞を読むこととなった。「あなたの言葉が一番私の心に届きました」とお褒めの言葉をいただき、それがお付き合いの始まりとなった。

それから2年後、ご家族であぶらむの里を訪ねてこられた。「お父さん、お願い事があったのでしょ」と、娘京子さんの後押しで胸の内をかたられた。「息子に褒美をくれてやろうと思って、記念の碑を建ててやろうと思うのです」と逸馬さん。その後のお父さんの話がおもしろく、そして羨ましかった。

「私ははじめ、息子はろくな者ではないと思っていたのですよ。だってそうでしょう。アラスカで何をしているのか、家へ電話するでもなし手紙をよこすでもなし。たまに電話があったかと思えば、おやじ成田まで迎えにきてくれ、おやじ金を貸してくれ。男が40歳にもなって親に金を貸してくれなんて、ろくな者ではないでしょう。（道夫さんゴメンナサイ、でもこの通りの内容でした。）…でも先立たれてみて、多くの方々からお褒めの言葉をいただき、また息子の残したものを讀んだりして、あれはあれで一生懸命生きてきたんだなあ、それなりの仕事をしてきたんだなあと思えるようになってきたんです。ご褒美に記念の碑を建ててやりたいのです」という会話だった。私は早速友人で旅行仲間の石材屋の川崎東介さんの力を借りることにした。

「飛驒の自然石」という指定と、設置スペースの図面が送られてきた。ほどなくして条件を満たした栗のような形をした石がみつかった。その石にどのような文字を刻むのか、今度はお父さんの出番だ。

送られてきた碑文はこうだった。「生命の光をさがしもとめて道夫は逝く」。大郷はどう思うかと意見を求められた。石に字配りをしてみたら今ひとつバランスがこない。そしてもう一つ何かほしかった。「あなたは何がいいと思われますか」、お父さんの厳しい質問が私にとんできた。私はしばし考えてからその後に続く言葉として「安かれ」



あぶらむの里に仮置された星野道夫記念碑

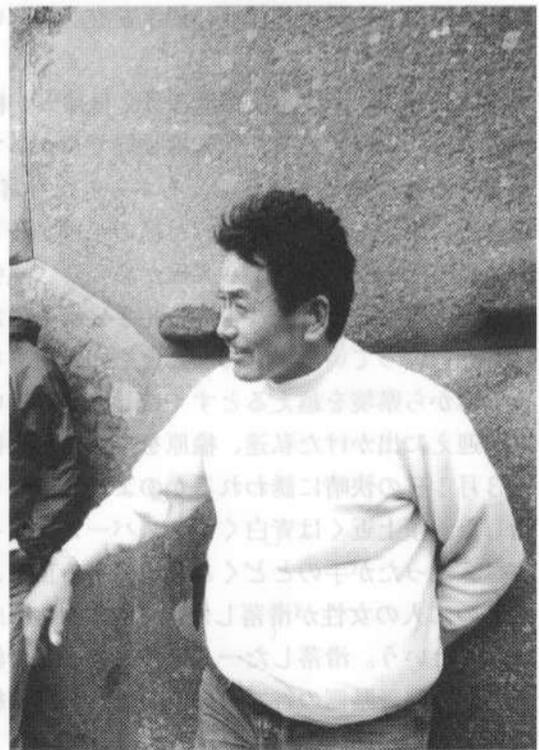


●川崎東介さん（66歳）2009年9月17日帰天。写真家星野道夫の記念碑をつくったのが東介さんだった。

1996年、世界最高峰エベレストを眺める旅を計画した。その旅に参加したのが東介さんであり、彼との出会いだった。標高4,200mのシャンボチェまで行く予定だったがけっこうな降雪に阻まれ断念。せめてエベレストが見える「エベレスト・ビューホテル」まで行こうということになった。ガイドが道を誤り、私たちは標高4,000mの所でウロウロしていた。猛吹雪で寒いなんてものではなかった。早くホテルに着き温かい一杯のお茶がほしかったその時、誰かが私の肩をたたいた。東介さんだった。「おい一緒に食べないか」。彼が吹雪の中で手にもっていたのは、小さな桃の缶詰だった。「この寒いのに何故桃缶なのだ!」。私はいらなといった。「そういわずに付き合ってくれよ」と東介さん。結局私は猛吹雪の中で震えながら彼と桃の缶詰を食べることとなった。

薪が燃える暖かな暖炉の前で暖かなお茶をのんで生き返った時、東介さんが「桃缶」の由来を話してくれた。私より2歳年上の彼、中学卒業してすぐに左官見習いとして信州諏訪へ丁稚奉公に出た。親方から教えられた事を一回でマスターできないと、金づちで頭をたたかれたという。頭はコブだらけ、痛さをふせぐためには一回で憶えることしかなかったという。その時始めて食べたのが「桃缶」だったと云う。「世の中にこんなうまいものがあるのかと思った。それは生涯忘れることのできない味だった。俺の家は本当に貧しかった。学校の授業では地理や歴史が好きだった。エベレストやスエズ運河、ヨーロッパアルプスの話を聞いた時など胸がさわいだ。実際に自分の目で見てみたかった。しかしこの貧しさ、それは自分にとっては夢のまた夢だった。でも、もしいつの日かその日が訪れたなら、俺はその時『桃缶』を食べることに決めていたのだ」。私は東介さんのこの話を聞いた時涙が出て仕方がなかった。そして、そんな彼がたまらなく好きになった。以来、エジプトから陸路イスラエルに出る時のスエズ運河の船上や、ペルーのマチュピチュなど旅のハイライトと思われる場所で、彼の「桃缶」に付き合うこととなった。

真っすぐで男気のある東介さん、弱音をはいたり涙など見せることは決してなかった。しかし、そんな彼が一度だけ男泣きに泣いた。娘さんゆきさんの「樽入れ（結納）」の時だった。全ての儀式を終えて後、フラリとあぶらむへやってきた。「俺は今日ほど嬉しい時はない。娘の樽入れ、立派に果たせれたからなあ。俺の家は本当に貧しかった。貧しさ故にいろんな事があつた。兄と一緒に『二人して力をあわせ、いつかは世に出よう



ペルー インカの遺跡オリヤンタイタンボでの東介さん。「俺も石屋だがこんなの見せられると明日から石屋をやめなきゃなんないなあ」と絶句。

なあ』と云いあい、支えあってきた。今日、立派に役目を果たせて本当に俺は嬉しい」。彼の「二人していつかは世に出ようなあー」という言葉が私から離れなかった。そんな東介さんが9月19日早朝、突然に逝ってしまった。4月上旬、医師より末期ガンを宣告されていたことなど、知る由もなかった。旅立つ5日前、彼は北海道出張中の私を訪ねてきた。妻から私の留守を聞かされ、「そうか、ヒゲ（私のアダ名）はいないのか…。バイクで北海道まで行くなんて元気だなあー」と淋しそうな顔でいったという。最後のお別れに来た東介さんだった。末期ガンであることを知りつつ、旅立つその日まで何事もないかのような顔をして働き続けた東介さん。その死顔は本当に凜としていた。「おいヒゲ、逝くということはこうして逝くんだぜ。お前は どうして逝くのか、お手並み拝見だぜ。しっかりと死んでこいよ」といっているような立派なデスマスクだった。

あの世での再会が楽しみな一人だった。星野道夫のお姉さん、三原京子さんから東介さんを偲んで次のような追悼の言葉が寄せられてきた。

「川崎東介さんのこと、とてもびっくりしましたし、残念に思います。あぶらむに行けばまたお会いできるものと思っていましたから。懐かしい写真ができました。やはりとてもすてきな方でした。東介さんのような真っ直ぐな方に道夫の記念碑をつくって頂いてほんとうに良かったと今、心からそう思います。道夫とはきっと心の通い合う方だったと感じます。今頃あちら側で初対面の握手を交わしている頃ではないでしょうか。父とも…。」

●**楡原伸君（45歳）** 2009年3月2日帰天。楡原伸君が逝ったその日の天気を私はよくおぼえている。家庭裁判所から補導委託で預かっている二人の少年が、私の誕生日記念プレゼントを「からだで」といって、あぶらむから富山まで76kmを歩いた日だった。3月1日、深夜3時に出発した二少年が、目標の午後7時まで16時間をかけてひたすら歩き通した。午前中は快晴、しかし午後から天候が急変し、風強く雨模様となった。その同時刻、楡原君は北アルプス唐松岳で巨大な自然を相手に滑落した仲間を助けるためと、自らが生き延びるために必死に闘っていた。そんなことを知る由もない私達だった。

飛騨から県境を越えるとすぐに「楡原」という町がある。徒歩で富山へむかっている二少年を迎えに出かけた私達、楡原を通過した時彼のことをうわさしていた。

3月1日の快晴に誘われるかのように彼ら6人のパーティーは北アルプス唐松岳山頂を目指した。頂上近くは青白くアイスバーンになっていたという。アイゼンなしが二人、引き返すべきだったが手のとどくところにある頂上、どうにか登ったものの、下山途中にアイゼンなしの二人の女性が滑落した。この時期、山では30~40m/sという想像を超える風が吹きすさぶという。滑落した一人の女性を必死で救助していた楡原君もこの強風に吹きとばされたのか、長野県側の谷で遺体で発見された。結局、この遭難事故で滑落した女性と計2名の犠牲者がた。

そんな彼の葬送式での説教をたのまれた。私には語る言葉がなかった。特に年老いたご両親を前に、語るべき言葉は何も持ちあわせてはなかった。

彼は地味で、目立つことをよしとしない後方の人だった。私が先頭に立って先陣を切るタイプなら、かれは後陣をしっかりと地道に守るタイプだった。積極的に誠実に「落穂拾い」をする人間だった。

そんな彼が、自分たちのパーティーから犠牲者を出し、彼自身が生きて生還してきたら、彼は多分人格を崩壊させるまで深く悩み苦しんだと思う。そんな私の彼への思いがあったのか、私は説教の中で「今回の遭難事故の中で、もし誰かが犠牲にならなければならなかったのなら、私は楡原伸君であってよかったと思う」と言った。年老いたご両親を前にこの言葉を口にするかどうか、私は悩み迷ったが、この言葉以外にご両親をなぐさめる言葉はないと思った。自分自身が生きのびることを考えれば、すみやかに下山して後は救助隊にまかせるか、すぐ近くの唐松岳山荘に避難して様子を見るなり、いくつかの選択肢があったと思う。しかし彼の人となりはそれを許さなかった。自分の身にせまる危険をかえりみず、滑落した人の側近くにたたずむことしか彼は自分に許さなかった。彼はそういう人間だった。なかなかできることではない。人間、極限状況に置かれた時その本性が明らかになる。すごい卒業生をもったと誇りに思うと共に、何か大きな課題をつきつけられたように思い戸惑っている。

御魂の平安を心から祈りたい。

●佐藤節子さん（96歳）2009年9月16日帰天。たった一度だけあぶらむを訪ねて下さった佐藤節子さん、翌年から三月になると決まって瀬戸内海春の名物、お手製の「いかなご（こうなご）」の佃煮を送って下さった。来る年も来る年も大きなタッパーに一杯送って下さった。高浜虚子の俳句に「いかなごにまず箸おろし母恋し」という句があるが、まさにその感だった。わたしたちはその「いかなご」の佃煮をいつしか「春告魚（はるつげうお）」と呼ぶようになった。それはまさに厳しい冬を越え、春を告げる魚だった。

そんなある日、「皆さんが心待ちにして下さっている『春告魚』、もうつくれなくなりました」という手紙が来た。春告魚に見る「老い」でした。

本年度、世を去られた方々の御魂の平安を祈ります。

## 『あぶらむチャレンジラン2009報告』

宮崎 秀貴

8月15日の早朝5時、あぶらむチャレンジランがスタートしました。長い1日の始まりです。参加者はそれぞれ3キロ、21キロ、100キロというゴールに向けて、静かに、しかし力強く走り出しました。

1984年夏、当時立教大学のチャプレンであった大郷先生が実行委員長となり、立教110周年記念「日本縦断100キロリレー」という大イベントが開催されました。日本の南北、沖縄と北海道をスタートして、1人100キロをリレーで繋ぎ、東京池袋の立教大学にゴールしました。

それから25年後の夏、昔の仲間が集まってもう一度走ろう、チャレンジしようという話になったきっかけは、大郷先生の呼びかけにより、去年のさくら道国際ネイチャーランに日本縦断100キロリレーを走ったメンバーでリレー参加したことです。私自身、社会人になってからは、まったく走っていなかったのですが、練習を始めてみると、仲間と集まって走ることが楽しみになってきました。

かつての大学生もみんな40歳台半ばとなり、日常生活では仕事に追われ、多忙な日々を過ごしています。走ることがきっかけとなり、仲間が再び集まり出しました。

日本縦断100キロリレーから25年、新たなチャレンジとして今回の企画を思いついたのは、昨年11月末でした。本当に100キロ走れるのか？参加メンバーは集まるのか？コース選定は？等々、やわやわだった企画から、メンバーが集まりだして、どんどん具体化していきました。

以下、あぶらむチャレンジランを終えた直後、参加メンバーがメーリングリストでやりとりした生々しい文章を抜粋して、報告とさせていただきます。

まずは、スタートの場面を100キロランナーの村岡薫からの報告です。

あぶらむチャレンジラン、そこに思いを寄せたみんなの気持ちが相乗された濃密な2泊3日でした。(中略)最初の3キロは、3キロ、21キロ、100キロ全員での周回。しぶきの湯の裏を回りこんでいく林間アップダウンコース。最初のしぶきの湯までは軽快なくだり、みんな走る！下田由香さんは「散歩ででも」といわれていたコースなのに結局バッグを肩にかけたまま走ることに。林間コースに入るとつづら折りの結構な登り、トレイルランのようなコースをそれぞれがマイペース。子どもたちは元気、3キロ組トップの久世萌子ちゃんに見送られて、21キロ、100キロ組は、再度あぶらむをあとに41号線までのくだりに入ります。体もあたたまって、まだまだ体も元気なこの下りは気持ちのよい区間、「戻ってくるときは上り・・・」なんてことは考えないようにしながら、気持ちよく走ります。

R41に出て2キロ強、左前方に山に登っていく結構な上り坂が見えてきます。「あそこを上ります」、と宮田くんが教えてくれます。「あそこ・・・」、坂に入る前の最後のコンビニ(その後40キロのエードまで店も自販もない)で宮崎、村岡は水を購入し、いよいよ峠越えの始まり。この頃には、中野陽介くんがもう姿も見えずに元気に先頭、あぶらむの静谷さんが続き、そのあとに西村、宮崎、宮田、村岡。市井紀子は左膝の痛みで上りはつらそ

う（このあと下田と一緒に走ってくれてるんですね）、そして倉持章子が100キロに備えマイペースに入っていきます。長〜い上りを約5キロ、21キロ組と100キロ組の分岐ポイント。宮崎とともに西村に手をふり、伴走バイクの大郷先生から「さあ100キロは、あの向こうの山の割れ目のず〜と先まで上りだ」との声に先の長い100キロ組の道のりが始まりました。（約15キロ地点）

50キロを過ぎた後半、宮田、村岡、宮崎の男性陣から、遅れながらもがんばる紅一点の倉持章子の状況をサポートしていた下田英一からの報告です。

このあと、15キロほど離れたところを一人で走り続けている倉持章子のサポートに行きました。身体がだいぶ重そうです。特製ドリンクを飲んでいましたが、段々と水ばかりになっていきます。どうも食べものがうまく消化していないようで、胸がつかえてしまっているようです。歩いています。水分補給はできますが、エネルギーは補給できないようです。また、歩きます。休んで、また歩き続けます。歩きます、前へ前へ。もう難しいかなあと思いつつ、少し先で待っていると、なんと走ってきました。胸のつかえをとったようです。少しすっきりして走れるようになりました。そのころすでに70キロエイドの制限である5時を過ぎていました。それでも、前へ進みます。70キロエイドを目指し、早くなりました。力を振り絞って、本当にあきらめない良い走りでした。

倉持章子は残念ながら70キロで制限時間オーバとなりましたが、見事な70キロ完走でした。25年前の日本縦断100キロリレーでは自転車伴走、25年を経てのすばらしいチャレンジでした。

さて、いよいよ100キロのゴールです。スタートから14時間半が過ぎ、トップで宮田がゴール、その後村岡、宮崎が続きました。

村岡薫のゴール場面の報告を引用します。

宇津江橋曲がる。「あと4キロだ」。100キロリレーのときは最後の10キロは走ったな、と思いながら、もくもくと早歩き、ここからも何度となくサポート車から励ましをもらい、道路右側の白線の上を忠実に進む、しぶきの湯までいったらほんとにあと少しだ、と考えながら、もうすっかり真っ暗な道をいく、オレンジの光、「しぶきの湯だ」、あと少し、しぶきの湯から走ろうと思ってたが、そこから勾配がきつくなる、なんてコースだ、あぶらむの入口あたりにライトの光、さすがに走る、迎えの声、花火、そしてゴール。

全体を総括して下田英一がまとめてくれました。

宮田さんは100キロを走るという約束を守りました。仕事のこと、家族のことを抱えつつ、また、体力的には衰えていて当然の中、25年前の自分に挑戦し、25年前の自分を越えて100キロを走り抜きました。そこには、3分という時間では表現しきれない大きな進化があるのではないかと思います。（宮崎注：宮田は25年前に100キロ走った時のタイムを今回3分更新しました。今回のコースの厳しさを考えると驚異的です。）

村岡さんが次に入ってきました。足の故障を乗り越え、100キロです。足の状態を考えると難しいのではないかと思わなくもなかったのですが、故障を抱えながらも走りきることができたということが本当に驚きでした。克服のランでした。ご家族が本当にうれしそうに村岡さんを囲みます。

宮崎さんが最後に入ってきました。今までチャレンジランのメンバーに声をかけ、大いな

るリーダーシップを発揮して下さいました。企画が良きものとなったのはリーダーの力が大きかったと思います。その責任をにないつつ、また、ランナーとしても見事な走りでした。ありがとうございます。

また、今回、私の車の助手席には中野陽介さんが乗ってくれて、ナビとして、また、サポーターとして活躍してくれました。助かりました。また、村岡麦さん、村岡樹くんも一生懸命役に立とうと動いてくれました。ランナーとして、サポートとして、お子さんたちとも一緒にすごせたのは、より楽しかったように思います。お子さんたちからみて、大人になるのも悪くないと思われるような存在でなくてはならないなど、襟を正す思いでした。

100キロを完走した宮田、村岡、宮崎を迎えて、参加者全員で歓喜の宴会へと突入したのでした。走り終えたばかりの3人はヨレヨレでしたが・・・

大人も子供もみんながそれぞれの役割で参加できたことがよかったと思います。本来、走るということは個人競技です。でも、今回のあぶらむチャレンジランは、参加者全員が一つのチームになっていました。スタートからゴールまで、細い山道も暗い夜道もまったく孤独を感じませんでした。自分が苦しいときに同じように苦しみながらもがんばっている仲間がいるということ、ランナーと一体になって応援してくれている仲間がいるということが、エネルギーとなりました。

これからの長い人生、まだまだいろんな事にチャレンジできそうです。

最後にトップでゴールした宮田義明からのメッセージでまとめとさせていただきます。

とにかくあっという間に終わってしまった100キロでした。週末が終わり、月曜日に普通に会社に来て、普通に仕事をしていると、本当に走ったのだろうかという錯覚を感じるほどの日常です。でも、銀行に行こうと歩き始めると足の筋肉痛は現実のことで、週末の出来事を思い出させてくれます。そんな訳で夢のような2泊3日でした。

感想はとにかく「楽しかった」です。走っている時も、ずっと思っていたのですが、本当に楽しい100キロでした。そして、皆さんのサポートはありがたく、本当に力になり、お陰さまで楽しい100キロを味わわせていただき、感謝感謝です。

私は仕事柄、基本的にいつもサポートする側で、自分が全開でプレーするプレーヤーでいることがないのですが、今回はプレーヤーに徹ささせていただき、色々な人にサポートしてもらえるとこのそばゆい状況でして、慣れぬ立場ゆえになかなか素直に皆さんにお礼もお伝えできなかったのですが、お陰さまで本当に楽しませていただきました。心から御礼申し上げます。

<あぶらむチャレンジラン2009参加メンバー> 敬称略

100キロ完走：宮田義明、村岡薫、宮崎秀貴

70キロ完走：倉持章子

21キロ完走（+サポート）：市井紀子、静谷英一、下田英一、中野陽介、西村正和、

3キロ完走（+サポート）：大郷博、久世治靖、久世萌子、下田由香、下田寛子、

中野えり子、村岡トモ子、村岡麦、村岡樹、

伴走車・写真：加倉井誠

今年で7年目、立教小学校5年生のあぶらむの里キャンプ。A組川辺宝弥君のマンガ風イラスト入りの感想文、とっても気持ちがよく出ているので皆様にもお届けします。

## 「飛騨高山～あぶらむの里～」

A組25番 川辺 宝弥

(はじめ [行く前])

ほくが、なぜこのコースを選んだかという、一番自然を使って遊べるからです。ねる時、楽しみでした。



(1日目)

とうとう、長いバスをおりてあぶらむの里にとう着だ～！もう、宿に着いたらしゃぎました。まず、①あぶらむのご飯を食べたら家よりうまくて、ほっぺがおちるほどでした。次に、②ごえもんに入りました。ありえないほど熱いけど、手作り感あふれてて良かったです。



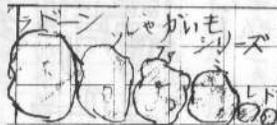
(2日目)

今日はあいにくの雨でもまず、①ピザ作りをしました。初めてだから緊張したけれど、大郷先生も初めてだといっている56枚ものピザを作りました。やっぱりみんなで力を合わせて作ったピザは、おいしかったです。今度は、②まきわりをしました。ほくたちのはんみんなで作ったできない木を先生が1ぱつでわってすごかった。その夜、③きもだめしをやった。本当は、4人で行くのに、前のグループと会い8人になりそれからまた4人走って来て、12人になったから、ぜんぜんへっちゃらだった。



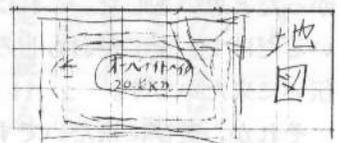
(3日目)

今日は、まず、①ジャガイモほりをした。ほくの所には、4ことチビコロが2つしかなかった。けど、ほくのは一番大きかったので、うれしかった。次に、②ペロちゃんにのって、たんけんしたりした。これは、ジェットコースターよりもすごくて、おもしろかった。また、きかいがあれば乗りたいと思った。あと、③Tシャツ作りをした。ほくのTシャツは、オヤジ魂とドデカク書いた、はでなTシャツだった。でも、これも、思い出になりそうだ！



(3日目から4日目)

とうとう、みんながまっているプログラムのオーバーナイトハイクだった。でも、ここしばらくの雨のせいで、6km近く、短くなったがすごく楽しみだった。もう、まもなく家(宿)を出てからみんなは、最初は話をしていたけれど、だん

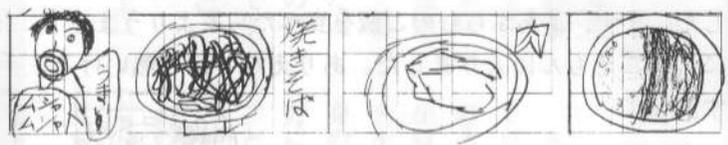


だん進むごとに無口になってきた。でも、やっと、消防署をすぎて、きねんの森へ行こうとすると、思ったより長くつらかった。でも、がんばってそこをすぎたと思ったら、すごい長く上がって行く坂、じごくの坂を登っていると、次は、水が上から来るので、くつがビチャビチャになった。だけど、がんばって着いたあとの風呂は気持ちいいし、その後のおかしやご飯は、よりサイコーだった。この経験は、大人のためになったと思う。

函を書きたいけど、つらくてあんまり  
おほえさないのここはナニシ!

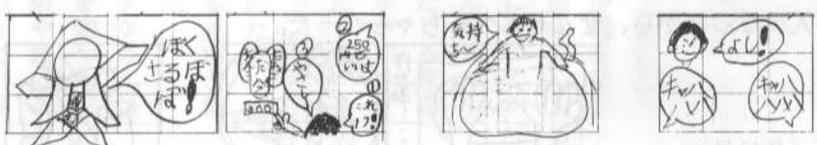
(4日目)

しばらくねてから、いろいろとった野菜を使って、昼は焼きそばと、肉を食べた。この焼きそばは、生まれて一番おいしかったし肉もすごくジューシーでうまかった。3ぱいもおかわりをした。カレーは、ほくが、野菜を切ったりした。これも、手作りならではの、すごくおいしいカレーだった。これも、3ぱいもおかわりをするほどのおいしさだった。だから、また食べたいぞー◎



(5日目)

今日は、雨などで予定がすごくかわったので、①高山市内で買い物をした。ほくはびつたし3千円使ったけど、やっぱり一番は、かわいい「さるぼほ」だった。おまけもしてくれる店もあったし、この辺の人はやさしいと思った。次は、②温せんに行った。やっぱり温せんは気持ち良くて、良いよなー。と、思った。次に、雨でキャンプファイアーができなかったので、③はんで出し物をだして、いろいろした。ほくたちは、げきをした。少しでも笑ってくれたので、うれしかった。でも、おの先ぱいの「おはよう。」が、おもしろかった。



(6日目)

今日は、初めて外で礼はいができて良かった。あと、最後にペロちゃんに乗れて良かった。あと、自然といっしょに遊べて、良かった。少しの間だったけど、「ありがとうございました」

ナニシ  
すいません!

飛騨 高山 雨  
飛騨 高山 雨  
飛騨 高山 雨  
飛騨 高山 雨

(まとめ [行った後])

おととい、帰って来て、やっぱり飛騨のコースで良かったと思いました。これは、代ひょう的に、言っているだけで、全てがおもしろかったです。今度、お手伝いに来たいです。

それか、遊びに来たいです。

# あんなこと そしてこんなこと

## あんなこと (2009年の主な報告事項)

### ●あぶらむガヴィス基金

本年度の支援先

- ・「コーディネラ・グリーン・ネットワーク」  
代表 反町真理子 (フィリピン) 継続  
活動内容 カリంగా州立大学に学ぶ5名の学生への奨学金
- ・草の根NGO「アジア子どもの夢」  
代表 川渕 映子 (富山県) 継続  
活動内容 ベトナム戦争枯葉剤被害児自立支援
- ・新座自然塾 (子どものフリースペース)  
代表 斉藤宗夫 新規

### ●家庭裁判所少年補導委託事業

受け入れ少年 3名

委託期間終了 (送り出し) 少年 2名

2009年度 6家庭裁判所と補導委託契約を結ぶ

(岐阜、神戸、大津、名古屋、津、富山)

## こんなこと (2010年の主な行事予定)

### ●あぶらむ雪祭り (冬期自然学校兼ねる)

1月9日～2月28日までの土・日・祭日。(尚、沖縄からの雪遊び訪問団は1月9日～11日の予定)

### ●あぶらむ春期自然学校 (3月下旬～4月上旬)

2010年度は3年振りのネパール・キャンプとするかどうか細部を検討中です。決まり次第ご案内いたします。第2案は沖縄キャンプとなる予定です。

### ●あぶらむ夏期自然学校

8月3日～8日 (予定)

### ●あぶらむ低山トレッキング

- ・猪臥山 (1,520m) 雪山トレッキング 3月21日 (日)
- ・乗鞍桔梗ヶ原—平湯トレッキング 7月18日 (日)
- ・天生湿原トレッキング 9月19日 (日)

### ●あぶらむチャレンジ

10月10日～12日 (予定)

### ●2010年あぶらむコンサート

- ・上方落語 桂 歌之助落語会 8月28日 (土)
- ・ウェイノ「アンデスの風」コンサート 10月中旬

## 2009年 あぶらむこの一年

- 1月・10日～12日、沖縄からの「雪遊び訪問団」。どうにか雪もまにあい、天候に恵まれる
  - ・石油ボイラーから薪ボイラーに切り替える。ボイラー室増築
  - ・家裁少年（9人目）受け入れ
  - ・31日 大雨となり、一気に雪どけとなる
- 2月・15日 この時期としてはじめてオートバイに乗る。静岡26.4℃全くの春模様（一月中旬より雪ほとんど降らず）
  - ・シイタケ、ナメコ植菌
- 3月・家裁少年二人、富山まで76km 完歩（15時間30分）
  - ・3日 楡原伸君遭難のニュース入る
  - ・14日 今年も春を迎えることの喜び「春一番の会」
  - ・家裁少年（8人目）帰る
  - ・第2回沖縄渡嘉敷島キャンプ（3月27日～4月1日 参加者21名）
- 4月・JA 岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
  - ・あぶらむに連なる全ての子どもたちの健康を祈って「鯉のぼり上げ式」
  - ・第16回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）参加者97名
  - ・山菜ぜんまい初取り、桜満開（例年より一週間早い）
  - ・四国松山ゆら野の里訪問
- 5月・田植え（20日）
  - ・石臼初挽き
  - ・ゲシュタルト・セラピー研修会
  - ・第4回津軽三味線2代目高橋竹山コンサート（30日）
- 6月・大郷、45年振りにハワイ訪問
  - ・熱帯地方のスコールのような激しい雨が続き、敷地内の川氾濫する。
  - ・五右衛門風呂づくり開始
- 7月・沖縄愛楽園訪問
  - ・五右衛門風呂初入浴
  - ・岐阜「生と死を考える会」研修会
  - ・ブルーベリー今年は大豊作
  - ・家裁少年（9人目）帰る
  - ・立教小学校あぶらむの里キャンプ（参加者26名）
  - ・家裁少年（10人目）受け入れ
- 8月・あぶらむ夏期自然学校（6泊7日 参加者18名）
  - ・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
  - ・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿研修会
  - ・あぶらむチャレンジ100km
  - ・芦屋聖コルコ教会キャンプ（51名）
  - ・五右衛門風呂完成
  - ・家裁少年（11人目）受け入れ

■■■■■■ 第2回「桂歌之助落語会」(11月8日) 賛一善人贈賞会 2008 ■■■■■■

- 9月・北海道新得協働学舎訪問  
・南木曾人間塾、石川洋、田岡由伎講演会  
・30日 稲刈り(例年より10日遅れ)  
10月・9日 乗鞍岳初冠雪。ストーブ初焚き  
・10日 第2回ウエイノ「アンデスの風」コンサート  
・14日 脱穀(例年より15%減収)  
・あぶらむ紅葉狩りサイクリング(富山まで76km)  
11月・逝去者記念式  
・3日初雪  
・凍結防止用のムロ完成  
・冬用野菜収穫、越冬準備開始  
・大阪庄内キリスト教会キャンプ  
12月・ベトナム・キャンプ視察訪問  
・家裁少年二人、富山まで76km 徒歩の旅(17時間48分)  
・家裁少年(10人目) 帰る  
・あぶらむ通信発送  
・クリスマス会

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

■■■■■■ 寄付者一覧('08年11月4日~'09年12月13日) 敬称略 ■■■■■■

星野一郎/東京聖テモテ教会奉仕会/竹田純郎・ひろ子/吉川恵子/高瀬章/本間太樹/俵里英子/味岡努・敏江/甲藤善彦・光江/長野純吉・紀子/伊藤淑子/ジーン・レーマン/長谷川秀司/八木克道/大八木米子/光安啓明/竹村真紀/速水直子/小嶋泰子/市川聖マリヤ教会/(株)アリミノ 田尾兵二/森田トミ/静岡聖ペテロ教会/松本昌子/須間栄津子/座間幹生/(株)鍋島商店 尾崎和廣/矢崎ふき子/平野幸男/小泉恵子/畑井正春/朝比奈誼/財満研三郎・由美子/山田日出夫/矢後和彦・正子/静谷英夫/渡辺洋一/佐瀬京子/新家恵子/宮崎なを/愛知聖ルカ教会/長谷幸雄/中部学院大学宗教委員会/北山和民/富山聖マリア教会/黒崎光太郎/一柳百/高瀬留美/目白聖公会/小野田恵子/渋谷聖ミカエル教会/山田益男/福岡女学院中学校・高等学校宗教部/太田喜元・昌子/小林佳容子/鈴木正士・裕子/本田リン/島田信弥/根本四郎/山口泰生/長尾文雄/中村芳枝/小柳證/沢田京子/川上玲子/高野優・永/水戸部賀津子/祈りの家教会/湯田啓一/鶴川雅行/三原エイ/江田宜子/谷章子/長谷川牧子/上田敏明/山里ツル/星野八千代/松岡和夫/宮城正男・正子/田中洋子/坂本吉弘/前田晃伸・容子/前田晃・広世/遠藤みね雄/村岡明・博子/円茶会 アッセマ/芦屋聖マルコ教会一同/島袋洋子/高野直樹/横浜聖クリストファー教会/大塚梅子/福島聖ステパノ教会/セントポールライオンズクラブ/佐藤節子/大槻カズ子/武藤六治/板垣義一/片倉小夜子/池崎純一

## |||||||2009年会費納入者一覧（'08年11月4日～'09年12月13日）|||||||

相沢牧人／朝比奈誼／穴井悦子／味岡努／新垣タケ子／荒井優仁・彩月／赤松道子／岩間光雄／岩坪哲哉／岩坪瑞枝／糸数宝善／糸数敦子／一柳百／猪野愈・三智子／伊東日出子／伊藤文雄／岩沢満・喜美／石崎東人／石崎奈生美／鷓川久・貴子／梅沢雪子／上田敏明／小野翠／小野裕／大八木米子／大城恵子／大脇一生／小川卓／大家俊夫／大槻カズ子／岡登信義／大塚梅子／小川智子／川口弘二／川上玲子／加倉井誠／河合昇／河合栄子／笠原雅子／岸井孝司・ミツ子／栗山盛雄／栗山洋子／黒田則子／竹村真紀／河野裕道／小池直子／三瓶富子／澤野弥生／斎田美代子／佐藤芳子／櫻井智則／沢田京子／佐藤節子／佐々木国夫・紀久江／笹岡淳也／佐藤哲典／清水幸平／志村弘子／渋谷一郎／下田英一・由香／鳥袋洋子／鳥文子／杉浦幸恵・めぐみ／鈴木孝雄／杉村進／鈴木冴子／鈴木眞喜子／仙敷正俊／高瀬留美／棚橋忍／棚橋美江／田口清吾／竹内元章／俵里英子／丹安紀子／田中孝子／筑井宏子／寺谷恵美子／泊哲次／桃源松五郎／時高照子／直井雅子／永井深雪／中台哲夫・信子／中山美世子／長坂尚／西村正和・未帆／西間木美恵子／西口晃／西口喜久枝／野田修助・和子／畑野榮一・寿子／畑井正春／長谷川秀司／土師晴子／畑中幸次郎／原田道一／平野幸男／日根野慶一／古市進／福田桂／福田亜矢子／福田一太／深田淳夫・馨子／星野一朗／松井明子／松居勲／前田眞智子／丸山恒／松田捷朗／又吉亀次／升本啓二郎／前田晃伸／前田容子／丸山富子／丸山千早／宮田洋子／宮城正男・正子／室岡鉄夫・恵／宗像和雄／宗像千代子／村田明美／向山信義／武藤六治／(株)メディア・プランニング代表取締役 高田年雄／百井幸子／森田喜之／山田益男／山里ツル／矢後和彦・正子／山内寿美子／山本岳／八木克道／矢野裕史／山本眞／中村洋／吉植よし子／吉野康／吉野美智子／渡辺洋一／川満すわ子／北昌子／日野忠市・静子／赤井充也／唐木田麻起子／川又勝美／大橋雅子／加納厚・美津子

## ||||||| 新規会員（'08年11月4日～'09年12月13日）|||||||

山崎美貴子／山口泰生／小林信夫・加代／浜村さとみ／石橋恵／柴原薫／前田晃・広世／片岡義博／渋谷真理／瀧口弘道／瀧口和子／高橋保／扇麗芳（台湾）

### 《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。